

法然上人における「八種選択義」の淵源 —「選択我名」を中心に—

南 宏信

(佛教大学仏教学部講師)

1. 『往生要集』とその時代

はじめに

平安時代における浄土教の大家恵心僧都源信 (942-1017) の活躍した時代は、三時思想 (正法・像法・末法) のうち、像法から末法に移行する (1052 年) 直前でした。自身の計らいが通用しない五濁悪世の末法に生きる人々がいかに六道輪廻の迷いの世界から抜け出ることができるのでしょうか。法然上人を論じる前に、まずはそのような人々のための指南書として執筆された『往生要集』の世界を探っていきます。

1-1. 末法と『往生要集』の影響

末法とは

釈尊の在世から長い時間が経過したために仏教が廃れ、その教えは残っていても、正しく行じる者や証 (さと) を得る者のいない、荒廃した時代。仏教の三時説における三番目の時代で、法然当時や現今もこれに含まれる。三時説とは、釈尊の入滅を起点に、仏教が完全に滅びる法滅までの時間を、正法・像法・末法 (正・像・末とも略す) の三段階に区切る時代区分である。釈尊の入滅の後しばらくは、釈尊が説いた通りの正しい教えに従って修行し、証果を得る者のいる正法の時代が続く。しかしその後、教と行は正しく維持されるが、証を得る者がいなくなる像法の時代、さらには教のみが残る末法の時代へと移っていき、ついには法滅に至るといふ。

(中略) 日本では『日本霊異記』がいち早く正法五百年・像法千年説に則り、延暦 6 年 (787) はすでに末法であると表明している。その後平安期後半に源信の『往生要集』や最澄に仮託した『末法灯明記』が著されるに伴い、末法思想は世に広く浸透した。そこでは正法千年・像法千年説を取り、周穆王^{ぼくおう} 52 年 (紀元前 949) の仏滅説から計算して永承 7 年 (1052) を入末法の年と見なす。(web 版『新纂浄土宗大辞典』から抜粋)

『往生要集』とは

源信 (942-1017) 撰。『往生要集』は平安時代を代表する浄土教の書であり、百六十数部数千巻にわたる經典や論疏から往生極楽に関する要文を集め、観想念仏を中心とする修行を説いている。→地獄・極楽・末法・滅罪・来迎・説法といったテーマは内面的・外面的に当時の貴族階級をはじめとし様々な人々・各時代に与えた『往生要集』の普遍的な影響は、仏教内にのみ留まることはない。日本

文化全体を論じる上においても逸することのできない書である。

1-2. 源信とその時代

- ① (A) 『楞嚴院廿五三昧結衆過去帳』(『過去帳広本源信伝』)
(B) 『首楞嚴院廿五三昧結縁過去帳』(『過去帳略本源信伝』)
- ② 『大日本国法華経験記』卷下第八十三首楞嚴院源信僧都
(『法華経験記源信伝』)
- ③ 『延暦寺首楞嚴院源信僧都伝』(『源信僧都伝』)
- ④ 『続本朝往生伝』(『続往生伝源信伝』)

1-3. 念仏の系譜

勸学会とは

康保元年(964)3月、天台の学僧と大学文章道の学生各20名が一堂に集い、『法華経』の句偈を講じ、弥陀の名号を称え、経の一句を題として詩会を催したのにはじまる。

勸学会の念仏

僧が偈頌をとなえ、俗が詩句を誦し、その唱和がかもしたす一種真言陀羅尼的效果を重視するものであって、当然そこで行われた「夕念仏」とは、甘美な旋法にのせて阿弥陀仏の名を唱和する称名念仏であった。

念仏の系譜①

四種三昧とは

中国天台智顛(538-597)の『摩訶止観』に説く。心を安定して一つの対象に専注し、正しい智慧を得るための実践方法を、身体の行動形式によって四種に分けたもの。・常坐三昧・常行三昧・半行半坐三昧・非行非坐三昧

天台6祖荊溪湛然(711-783)のころから浄土教的色彩が強まる。

法照(8世紀中頃)…善導の後身と尊称された。五会念仏を修する。

五会念仏…高低緩急を異にする五種の旋律を用いる念仏唱和法。

承和14年(847)帰朝した**円仁**(794-864)は、常行三昧の作法として中国の五大山を中心に流行していた**五会念仏**を伝える。音楽性豊かな称名念仏として比叡山で発達し「山の念仏」とよばれた。勸学会の念仏も、この「山の念仏」の流れをくむ。

念仏の系譜②

貞観5年(863)御霊会を神泉苑で行う。

次第に死霊の恐怖・追善の必要性が民間についても認識されるようになる。死霊鎮送・祖霊追善の仏教が貴族社会だけではなく、民間でも広く行われるようになった。その中で称名念仏が真言陀羅尼と並んで修された。称名念仏が、さまよう死霊を浄土に鎮送するマジカルな真言陀羅尼的性格で理解

される。称える僧も、厳しい修行で靈力を身に付けた験者であればあるほど念仏の利益は大きいと考
える。→「験者の念仏」

空也（903-972）（市聖・阿弥陀聖）〈伝記〉源為憲『空也誄』、慶滋保胤『日本往生極楽記』

『阿弥陀仏白毫観』天元4（981、40歳）…「山の念仏」でもなく、「験者の念仏」でもない、源信が最
初に著した念仏理論書。『観無量寿経』第九、真身観にみえる白毫観を詳細に説いたもの。

即空即仮即中の三諦円融…

三諦とは三種の真理。すべての存在は空であり仮であるとともに両者を超えた絶対的なもの〈中〉
で、しかも三者は別なく融け合っている。

1-4. 風葬・遺棄葬の日本古代

穢れを恐れた古代仏教

六世紀に公伝した仏教は、日本社会に根付いていった。その結果、10世紀には、天皇の葬儀にも仏
教者が関与するようになり、貴族の葬儀も僧侶が行うようになっていった。葬儀の次第が儒教の『礼
記』に依拠しており、儒教式に仏教が取り込まれたに過ぎない。穢れ忌避の関係などから、僧侶たち
が葬儀に積極的に関わろうとしていなかった。

五体不具の穢れ

【死穢】葬送・改葬・墓の発掘などに携わったために生ずる穢れ。その穢れに触れた人間は普通、
30日間、神事や参内などを忌み慎む。「体の一部が欠けている死体」の場合は7日だった。これを
「五体不具穢」という。

『延喜式』（927年完成、967年施行）の定める穢れ ※源信（942-1017）

人の死・産、家畜の死・産、肉食、改葬、流産、懐妊、月事、失火（火事）、埋葬など。穢れが基
本的に伝染すると考えられていた。

「五体不具穢」史料の減少

1220年代には急激に減少する。蓮台野が大規模共同墓地として成長し、葬送に従事する清水坂の非
人が組織化された。坂非人が死体を運ぶ。鎌倉仏教（遁世僧教団）の成立と境内墓地の成立が重要な
背景であった。すなわち死穢を憚らず葬式に従事する鎌倉仏教教団が成立し、それと連動した動きの
結果として大規模共同墓地が成長し、京都清水坂の非人の組織化があった。（法然の往生は1212年
である。）

葬送儀礼を忌避した官僧・神事に携わった官僧

二十五三昧会

『往生要集』完成の翌寛和2年（986）5月に横川で発足した念仏結社。25人の結衆で構成。極楽

に往生できるように助け合い、阿弥陀の縁日である毎月 15 日の夕に集まって念仏三昧を修するように定められた。ことに葬送協力に関する規定はこれ以前に例を見ない。(『横川首楞嚴院二十五三昧起請』)

求められた葬送

死穢を典型的例とする穢れを避けることは古代・中世の人々、特に官人や官僧にとっては重要な関心事であった。ようするに、死体は穢れた存在とみなされていた。ところが葬送を望む庶民の話が説話集などにしばしば見られるようになる。慈悲の為に穢れを憚らず葬式を行う僧侶、言い換えれば慈悲のために穢れ忌避のタブーを敢えて犯す僧侶たちが出現してくる。

1-5. 『往生要集』の内容

序文

それ往生極楽の教行は、濁世末代の目足なり。道俗貴賤、誰か帰せざる者あらん。ただし顕密の教法は、その文、一にあらず。事理の業因、その行これ多し。利智精進の人は、いまだ難しと為さざらんも、予が如き頑魯の者、あに敢えてせんや。

この故に、念仏の一門に依りて、いささか経論の要文を集む。これを披いてこれを修むるに、覚り易く行ひからん。惣べて十門あり。分ちて三巻となす。一には厭離穢土、二には欣求浄土、三には極楽の証拠、四には正修念仏、五には助念の方法、六には別時念仏、七には念仏の利益、八には念仏の証拠、九には往生の諸業、十には問答料簡なり。これを座右に置いて、廃忘に備へん。

(岩波文庫『往生要集(上)』より)

大文第一 厭離穢土門…①地獄道、②餓鬼道、③畜生道、④修羅道、⑤人道、⑥天道、

大文第二 欣求浄土門…十楽

大文第三 極楽証拠門

問、十方に浄土ありと言われるように、浄土は本来多数存在するのに、なぜ特に「極楽」の往生のみを願うのか。

答、まず十方の浄土に比較して、次に古くから信仰盛んな弥勒の兜率天に比較して、極楽の優越性を説く。

「弥陀・極楽の信仰の優れたことを説きながら、他の信仰の存在意味も容認する源信の立場は、すべての行に成仏の因を認める天台浄土教の諸行往生主義と通じ合うところであろう。」(速水侑『源信』p.104 より)

大文第四 正修念仏門

①礼拝門、②讚歎門、③作願門、④観察門、⑤回向門

観察門(色相観)

①別相観…阿弥陀仏の相好を、四十二に分類し(一般に三十二相)その一一を観想する観念である。

②惣相観…華座並びに阿弥陀仏の相をすべてひっくるめた全体を観想すること。

③雑略観（極略観）…単に阿弥陀仏の白毫のみを観想する方法。

もし相好を觀念するに堪へざるものあらば、或は帰命の想に依り、或は引摂の想に依り、或は往生の想に依りて、応に一心に称念すべし。〈已上。意樂、同じからざるが故に、種々の観を明かす。〉

（岩波文庫『往生要集 上』p.238）

大文第五 助念方法門

①方所供具…念仏する場所・供物・道具について、②修行相貌…念仏する時の態度や期間、心がけ、③対治懈怠…怠け心を止める、④止悪修善…悪を止めて善をする、⑤懺悔衆罪…犯した罪を悔い改める、⑥対治魔事…種々な邪魔や障害を除くこと、⑦惣結要行…往生にとって必要な修行の総括
※修行相貌において三心・四修について言及する。

「第七に、惣結要行とは、問ふ、上の諸門の中に陳ぶる所既に多し。いまだ知らず、いづれの業をか往生の要とするを。答ふ。大菩提心と、三業を護ると、深く信じ、誠を至して、常に念仏するとは、願の隨に決定して極樂に生ず。いはんやまた、余のもしもろの妙行を具せんをや。」（岩波文庫『往生要集 上』p. 346）

大文第六 別時念仏門

大文第四・五門の念仏…平生の時に行う「尋常の念仏」

特別の場合の念仏のありかた→「別時の念仏」

①尋常行儀（尋常の別行）…平生でも一定の日時や場所を限って行う場合を述べる。

→善導『観念法門』で『般舟三昧經』を引用する。

②臨終行儀（臨終の別行）…臨終念仏のあり方

- ・病人を西向きにする。
- ・仏像の手に五色の糸を握らせて病人の不安を和らげる。
- ・臨終者の為に声々あいつぎ念仏する。

→「二十五三昧會」の実践。「臨終の一念、百年の業にも勝る。」「如来の本誓は、一毫も謬あやまること無なし。願わくは、ほとけ決定して我を引接し給たまえ」

大文第七 念仏利益門

①滅罪生善、②冥得護持、③現身見仏、④当来勝利、⑤弥陀別益、⑥引例勸信、⑦惡趣利益

大文第八 念仏証拠門

①「問ふ、一切の善業は、おのおの利益ありて、おのおの往生を得。何が故に、ただ念仏の一門のみを勧むるや。」（岩波文庫『往生要集 下』p.109）

→特に念仏の一門を勧めた理由を、諸經から十の引用文によって証拠だてている。

②「問ふ。余の行、いづくんぞ勸信の文なからんや。」（岩波文庫『往生要集 下』p.114）

→念仏のように、直接往生のために説かれることがない。

③「問ふ。諸經の所説は機に隨ひて万品なり。なんぞ管見を以て一文を執するや。」（岩波文庫『往生要集 下』p.115）

→『大乘起信論』には、心が弱い人は西方の阿弥陀仏を願いなさいと説明している。

大文第九 往生諸行門

「極樂を求むる者は、必ずしも念仏を専らにせず。すべからく余行を明かしておのおのの樂欲に任すべし。」(岩波文庫『往生要集 下』p.117)

①明諸行→『華嚴經』『法華經』『三千仏名經など』

②総結諸業→『梵網經』に説く十重・四十八輕戒

大文第十 問答料簡門

①極樂正依…極樂の国土と仏、②往生階位、③往生多少、④尋常念相、⑤臨終念相、⑥麤心妙果、⑦諸行勝劣、⑧信毀因縁、⑨助道資縁、⑩助道人法

往生階位→善導『往生礼讃』『專雜二種』

もしよく上の如く念々相續して、畢命を期とする者は、十は即ち十ながら生じ、百は即ち百ながら生ず。何をもつての故に。外の雜縁なく、正念を得るが故に。仏の本願と相応するが故に。もし專を捨てて雜業を修せむと欲する者は、百の時に希に一二を得、千の時に希に五三を得。

2.「法然上人における「八種選択義」の淵源

八種選択義とは(→『選択集』第16章)

一、**選択本願**：念仏は法蔵菩薩が本願の中で選択された往生行である(第三章)

二、**選択讚歎**：釈迦は三輩段で余行をも説かれたが(第四章)念仏のみを〔選択して〕「無上功德」と讚歎された(第五章)

三、**選択留教**：釈迦は念仏の教えのみを〔選択して〕末法以降にまで残される。(第六章)

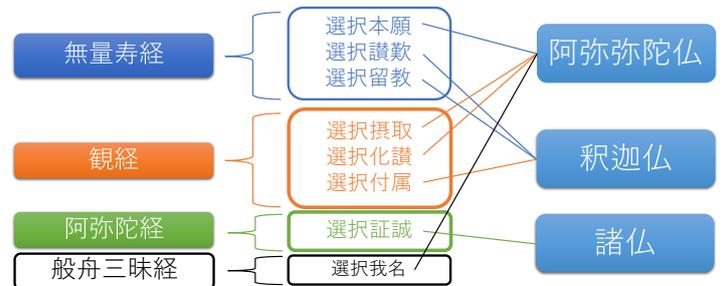
四、**選択摂取**：弥陀の光明は念仏者のみ〔を選択して〕利益を与える(第七章)

五、**選択化讚**：下品上生の人が臨終に經を聞き念仏するのに化仏は念仏のみを〔選択して〕讚歎する(第十章)

六、**選択付属**：釈迦は定散の諸行をも説いたが阿難に念仏のみを〔選択して〕託される(第十二章)

七、**選択証誠**：念仏による往生のみを諸仏が証明される(第十四章)

八、**選択我名**：阿弥陀仏は自ら「往生を望むなら我が名を念ぜよ」と勧められる。



「八種選義」は浄土三部經からそれぞれ導出しているにも関わらず、「選択我名」だけは『般舟三昧經』から導出されている。

『選択集』十六章

加之^{シカノミナラズ}般舟三昧經ノ中ニ^ニ又有^一ノ選擇^一。所謂^ル選擇我名^{ナリ}也。彌陀^ミ自^ミ説^テ言^ク。欲^{スル}來^ニ生^{セント}我國^ニ者^ハ常^ニ念^{ジテ}我^ノ名^ヲ莫^レ令^レ休息^{ルコト}。故^ニ云^フ選擇我名^ト也。

2-1.先行研究

藤堂恭俊「法然の偏依善導一師と八種選択義」(『法然上人研究』一〈思想編〉、山喜房仏書林、1983年)

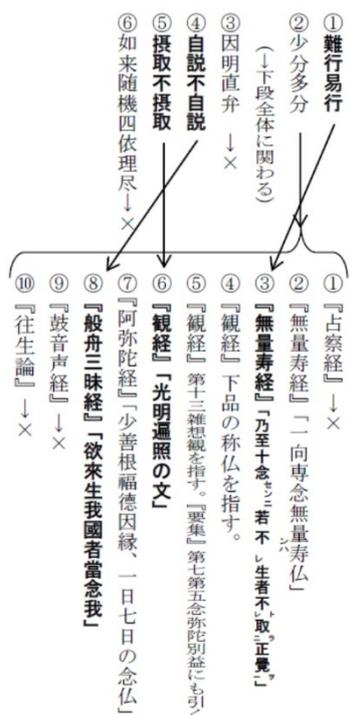
安達俊英「法然上人における選択思想と助業観の展開」(『浄土宗学研究』17、1991年)

川島一通「『逆修説法』から『選択集』へ」(『大正大学大学院研究論集』23、1999年)

我孫子稔章「『逆修説法』二七日所説の念仏勝義性を示す八文について—『選択集』所説八種選択義との対比を通じて」(『浄土学』49、2012年)

角野玄樹「『逆修説法』第二七日における八種義の成立」(『佛教大学仏教学部論集』98、2014年)

2-2. 『往生要集』大文第八念仏証拠門所引の『般舟三昧経』



『往生要集』六義

『往生要集』大文第八念仏証拠門所引の十文

六義のうち三種は「八種選択義」へと繋がっていく「浄土三部経」からの引文である。『往生要集』大文第八念仏証拠門で引用し、法然が『往生要集』で自説不自説義を導出する『般舟三昧経』は三巻本である。

ここでは「念我」となっている。これに対して一巻本の対応箇所は「念我名」(『選択集』)となっており、「念我」ではなく「念我名」である。

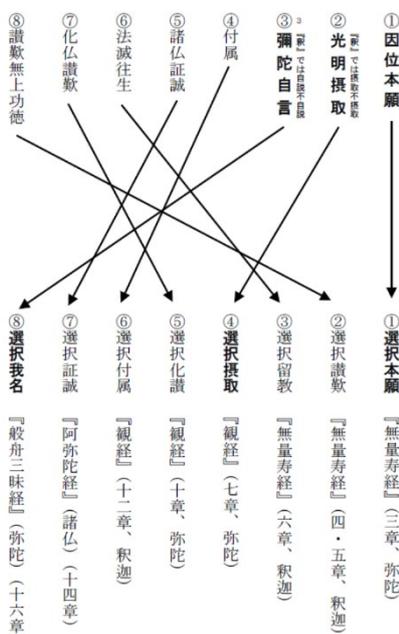
『往生要集』(『浄全』15巻) → 三巻本

八^ニ般舟経^ニ云。阿彌陀仏^ノ言。欲^セ来^レ二生^ニ我^ニ国者^當念^レ我^ヲ数^ニ数^ニ常^ニ當^ニ専念^ス莫^レ上^レ有^ル二休息^一如^シ是^レ得^ニ来^ニ生^スス^ル我^ニ国^ニ。

『往生要集』に説く六義 → 三巻本

二、自説不自説。謂、諸行阿彌陀如来不説自。當修之。念仏説自「當念我」。

2-3. 『逆修説法』二七日に見る「弥陀自言」



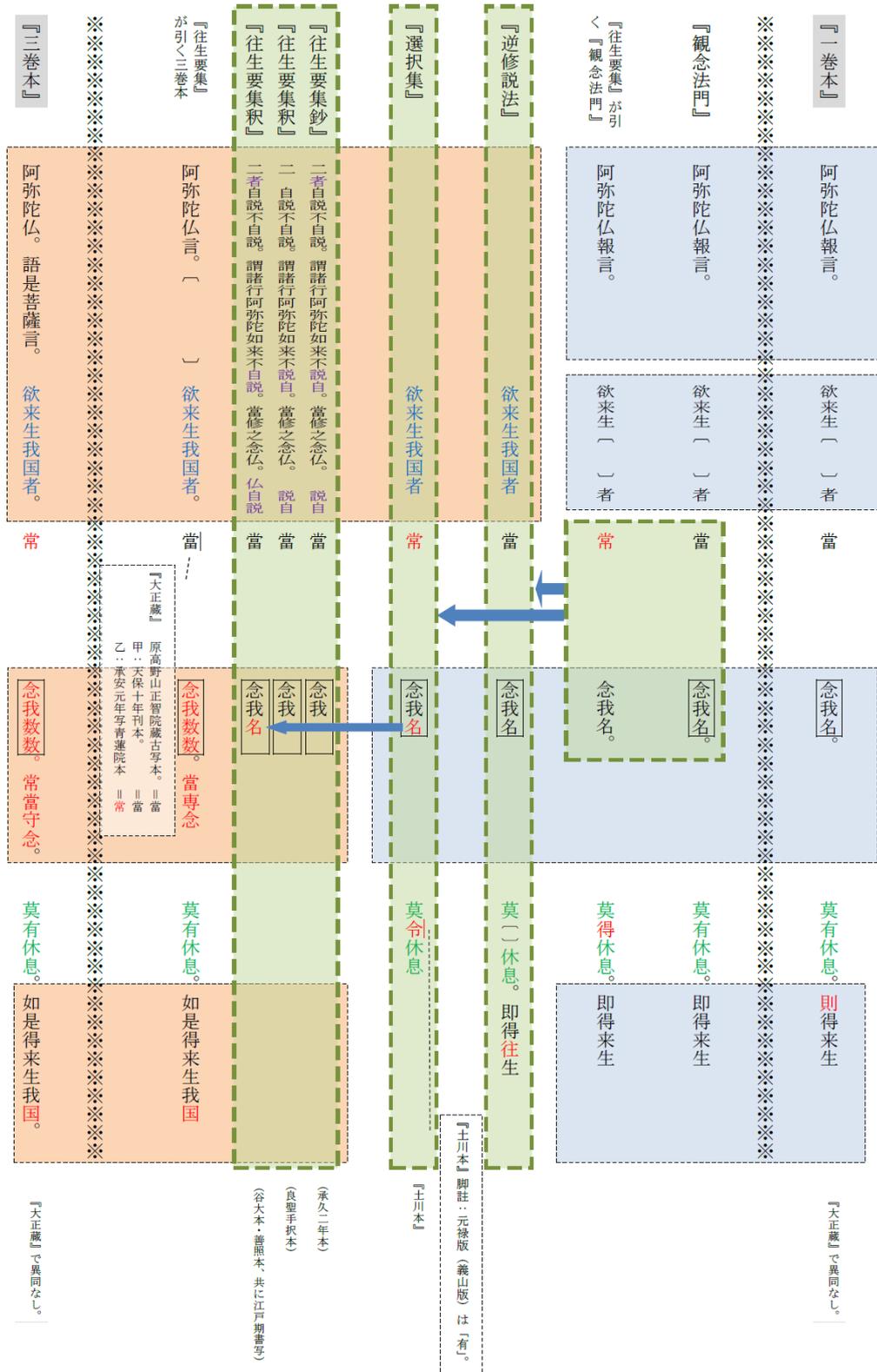
『逆修説法』二七日

『選択集』(三部経の順)

法然は『逆修説法』二七日で「八種選択義」の素地を説く箇所や『選択集』において『般舟三昧経』を引用する場合には一巻本で説く「念我名」を使用するようになる。この三巻本から一巻本への移行はどのようにして起こったのか。それは藤堂氏が示唆しているように『往生要集』大文第六別時念仏門に引く善導『観念法門』が一巻本を引用するからだと思われる。

2-4. 『選択集』に見る『般舟三昧経』の引文

ここで注目すべきことがある。法然が『逆修説法』『選択集』で引用する『般舟三昧経』は三巻本にも一巻本にも完全には一致しないことである。言うなれば最初『往生要集』が引用する三巻本を引用しているが、「念我名」が出てくる一巻本の後半部分を三巻本の当該箇所へ置換した形で引用していることである。



2-5. 『古本漢語灯録』の問題

- ・金沢文庫蔵『往生要集鈔』法然滅後8年の奥書 → 「念我」
- ・金沢文庫蔵『往生要集積』良聖手沢本 → 「念我」
- ・良忠所引（『往生要集義記』）の『往生要集積』 → 「念我」

- ・『古本漢語灯録』所収『往生要集積』（江戸時代） → 「念我名」

金沢文庫蔵『往生要集鈔』と同蔵『往生要集積』はともに「念我」とあり『般舟三昧経』三巻本からの忠実な引用である。この金沢文庫蔵『往生要集鈔』は法然滅後八年の書写奥書があり、同蔵『往生要集積』は良忠の弟子良聖（1234—没年不明）手沢本である。ともに法然の活躍した時代に迫る資料である。

一方、元禄年間（1688—1704）に書写された恵空（—1721）所持本の系統に位置付けられる『古本漢語灯録』（大谷大学蔵本、善照寺蔵本）と義山（一六四八—一七一七）開版『新本漢語灯録』の当該箇所は「念我名」とある。従来この箇所は『往生要集』に引く三巻本の「念我」と引用しなければならないが、文章は三巻本のままで、「念我」の箇所だけ「念我名」とするのである。

『古本漢語灯録』は、法然研究における一級の資料であることは周知の事実であるが江戸時代の書写であり、『新本漢語灯録』も江戸時代の成立であることを勘案するに、「選択我名」について相当程度熟知していた者が『古本漢語灯録』所収の『往生要集積』に「名」の文字を加え、『選択集』所説の「選択我名」と整合性を図ろうとしたと推察される。その作業は法然自身ではないであろうことは、本稿で成立過程を考察してきた通りである。今後『古本漢語灯録』の検討作業の継続が必要であろう。

2-6. おわりに

① 「念我」から「念我名」へ

『選択集』は「浄土三部経」を基に構成しているにもかかわらず、なぜその構成を崩すような形で『般舟三昧経』から導出される「選択我名」を加えて八種としたのか。

まず法然は源信『往生要集』大文第八念仏証拠門において『般舟三昧経』の三巻本の「念我」を引用し、法然『往生要集積』等ではそれを受けて「自説不自説義」を立てる。その後『逆修説法』では、一卷本の「念我名」へと引用元を変更し「彌陀自言」を立て、さらに『選択集』で「選択我名」に昇華していく成立過程を見た。法然はここでは文献学的な知見のもとに、直接三巻本と一卷本とを比較した結果「念我名」の一卷本に変更した訳ではなさそうであるが、三巻本から一卷本への移行の理由として法然の善導への傾倒（偏依善導一師）が挙げられる。

② 「偏依善導一師」

三巻本（「念我」）から一卷本（「念我名」）への移行の理由は、善導が『観念法門』で引用するのが一卷本によっているからだと考えられる。この一卷本を引用する『観念法門』の引用は『往生要集』大文第六別時念仏門が引用する。『往生要集積』等ではいまだ「自説不自説義」であったのが『逆修説法』の「八種選択義」の素地である「凡念佛往生之勝于諸行往生有多義」において「彌陀自言」へ

と展開するが、その背景には善導への傾倒が予想される。

③「選択我名」の必然性—淵源としての『往生要集』—

「自説不自説」から「彌陀自言」への過程は前述の通りであり、『逆修説法』所説「八種選択義」の素地と『選択集』「八種選択義」の対応関係を見ると、『逆修説法』は阿弥陀仏を中心とした順番になっており「彌陀自言」は三番目に挙げられている。する『般舟三昧経』の「念我」について長年逡巡していることが窺える。

『往生要集』が引用それが『選択集』では「浄土三部経」を軸に構成されるので、最終章で唐突に追加挿入したように感じられるが、「選択我名」は『往生要集』大文第八念仏証拠門に端を発しているのである。